

幾つかの「ドイツ統一」

日本は「一民族、一国家」32の国と呼ばれる。つまり、単一の民族からなる国である。これに対し、「人種のるつぼ」と呼ばれるアメリカ合衆国は、多種多様な民族からなる国であり、換言するならば、移民国家である。

ヨーロッパ諸国でも様々な民族が共存しており、「一民族、一国家」は例外である。特に、ユーゴスラビアは「七つの国境、六つの共和国33、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国家」として知られていた。しかし、1989年に東西冷戦が終結すると、民族間の対立が激化し、分裂した。



- 32 「単一民族国家」とも呼ばれるが、厳密には、北海道の先住民族であるアイヌや朝鮮半島や台湾から渡ってきた民族やその子孫が国内に在住している。
- 33 スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニアの6つの共和国である。なお、セルビアには、さらに、ヴォイヴォディナとコソボの2つの自治州が存在した。

他方、同一の民族が別々の国家を樹立している例もある。例えば、ドイツとオーストリアである。つまり、両国ともゲルマン民族の国であるが、それぞれ独立した国家である。なお、アドルフ・ヒトラー(Adolf Hitler 1889~1945)はオーストリア出身であるが、ドイツで政治的に大成し、総統となる。その後、ヒトラーは母国オーストリアをドイツに併合する。つまり、1933年から1945年まで、ドイツとオーストリアは合併し、一つの国となるが(オーストリア併合後のドイツを「大ドイツ国」と呼んだ)、第2次世界大戦で負け、分断させられることになった。なお、オーストリアはドイツとの合併の継続を希望したが、戦勝国である連合国によって却下されたため、独自の道を歩まざるをえなかったという事情がある。

ゲルマン民族の国としては、その他にも、バイエルン、プロイセン、ザクセンなど300を超える諸邦(国)があり、それらがまとまって「ドイツ」になるのは、19世紀後半、つまり、日本では江戸時代末期のことである。この「ドイツ統一」は、プロイセンを軸にして進められたが、これはナポレオン3世(Napoleon III 1808~1873)に対する抵抗も意味していた。つまり、フランスとの戦争に勝利するため、ゲルマン民族は団結するのである。この戦争は普仏戦争(1870~1871)と呼ばれるが、「普」はプロイセンを指す。プロイセンに率いられ、普仏戦争に勝ったドイツ諸邦は、ドイツ国内ではなく、パリのベルサイユ宮殿で「ドイツ帝国」の成立を宣言する。同時にプロイセンの王であったヴィルヘルム1世(Wilhelm I 1797



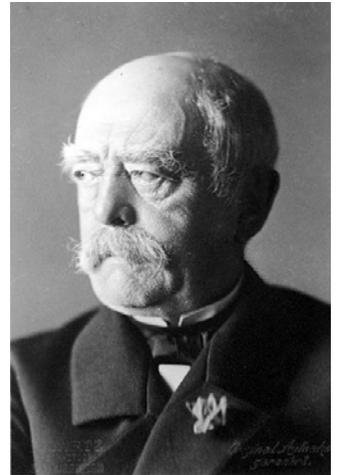
～1888) を初代皇帝に据える。

彼と同じ時代に生きた他のドイツ王としては、「白鳥城」(Neuschwanstein) を建立したことで知られる、バイエルンのルートヴィヒ 2 世 (Ludwig II 1845～1886) がいる。このバイエルン王家からは、現在でも「シシー」という愛称で慕われている、エリザベート (1837～1898) が出ているが、ルートヴィヒ 2 世は彼女の従兄である。「シシー」はオーストリア皇帝であるフランツ・ヨーゼフ 1 世 (Franz Josef I 1836～1916) の妻となり、オーストリア・ハンガリー帝国 (1867～1918) の成立に尽力した。このように、オーストリアがハンガリーと手を結んだのは、ドイツ諸邦との戦争 (1867年の普墺戦争) に敗れ、国力が衰えたためであるが、異民族の国家であるハンガリーと、いわば「結婚」したため、血統を重んじるドイツ諸邦からは疎んじられるようになる。第 1 次世界大戦後、「オーストリア・ハンガリー帝国」は崩壊し、ゲルマン民族の国家に戻ったオーストリアは、後に、ヒトラー政権下でドイツに併合される (前述参照)。



なお、プロイセンでは秩序や勤勉が重んじられ、日本は「東洋のプロイセン」と呼ばれることがある。明治維新期の日本は、当初、「ナポレオン法典」で有名なフランスから民法を「輸入」しようとしていたが、普仏戦争でドイツが勝利したことを受け、方向転換し、森鷗外を初めとする官僚がドイツに派遣されるようになった。日本民法が仏法的な性格と独法的な性格の両方を持っているのは、そのためである。

ところで、プロイセンが推進力となって実現したドイツ統一は、ビスマルク（Bismarck 1815～1898）の存在なくして語れない。彼はヴィルヘルム1世の治世下でプロイセンの首相となり、国威発揚や富国強兵に大きく貢献した。すでに述べたように、ドイツ諸邦は1867年の普墺戦争でオーストリアに勝利し、オーストリアを弱体化させるが、これもビスマルクの策略によるものであった。また、1870～71年の普仏戦争でドイツ諸邦が勝利を収めるのも、彼の功績によるところが大きい。ドイツ統一は鉄と血、すなわち、兵器と兵力によつてのみ実現されると述べたことから、ビスマルクは「鉄血宰相」の異名でも知られている。内政面では、新しく発足したドイツ帝国の治安を維持するため、反対勢力や社会主義運動を徹底して封じ込める一方、世界で初めて社会保険制度を導入した。



ところが、ヴィルヘルム1世が退位し、その長男であるヴィルヘルム2世（Wilhelm II 1859～1941）が即位すると、ビスマルクは失脚する。つまり、若き新皇帝は、父の時代の「鉄血宰相」を退陣に追いやり、新しい政治を始めるのである。彼の政策に大きな影響力を及ぼしたのは、外交官の経歴を持つオイレンブルク（Eulenburg 1815～1881）であった。伯爵家出身のオイレンブルクは、プロイセンの外交官としてバイエルンに派遣され、ルートヴィヒ2世に謁見したこともあった。また、1861年には江戸幕府と通商協定を締結している。

オイレンブルクの勸めもあり、ヴィルヘルム 2 世はフランスとの和解を考えるようになる。皇帝は普仏戦争で獲得した領土（アルザス・ロレーヌ地方）の返還まで視野に入れたが、それは当時のドイツにとってスキャンダラスなことであった。最終的に、軍部の反対にあい、和平構想は闇に葬られる。また、オイレンブルクは私生活（同性愛者であること）を暴露され、政界から姿を消すが、彼の失墜を目論み、陰で動いていたのはビスマルクであった。

平和の推進役を失ったドイツは軍備拡張に傾倒し、第 1 次世界大戦に突入することになるが、ドイツはこの戦争に敗れ、ヴィルヘルム 2 世も失脚することになった。ドイツの最後の皇帝（ラストエンペラー）となった彼はオランダに亡命し、第 2 次世界大戦中の 1941 年に死亡するまで、二度と祖国の地を踏むことはなかった。同時に、ドイツ帝国も崩壊し、「ワイマール憲法」で知られるワイマール共和国に変わる。また、普仏戦争で獲得した領土はフランスに奪い返されるだけでなく、ドイツの領土の一部（ザールラント）がフランスに割譲される。なお、後に、この地域の住民はドイツ復帰を住民投票で決め、ヒトラー政権下で復帰が実現する。しかし、ほどなくして始まった第 2 次世界大戦でドイツは負け、同地域は、再び、フランスに占領されることになった。しかし、再度、住民投票でドイツ復帰を可決し、1960 年代にドイツ領に戻った。このように、比較的短期間の内に帰属先が度々変わったのは、この地域が石炭の産地であり、鉄鋼業が栄えていたためである。第 2 次世界大戦後、独仏両国は、平和の実現には石炭と鉄鋼を共同管理下に置くことが重要であると悟り、欧州石炭・鉄鋼共同体を設立する。現在、同共同体は EU に発展している。